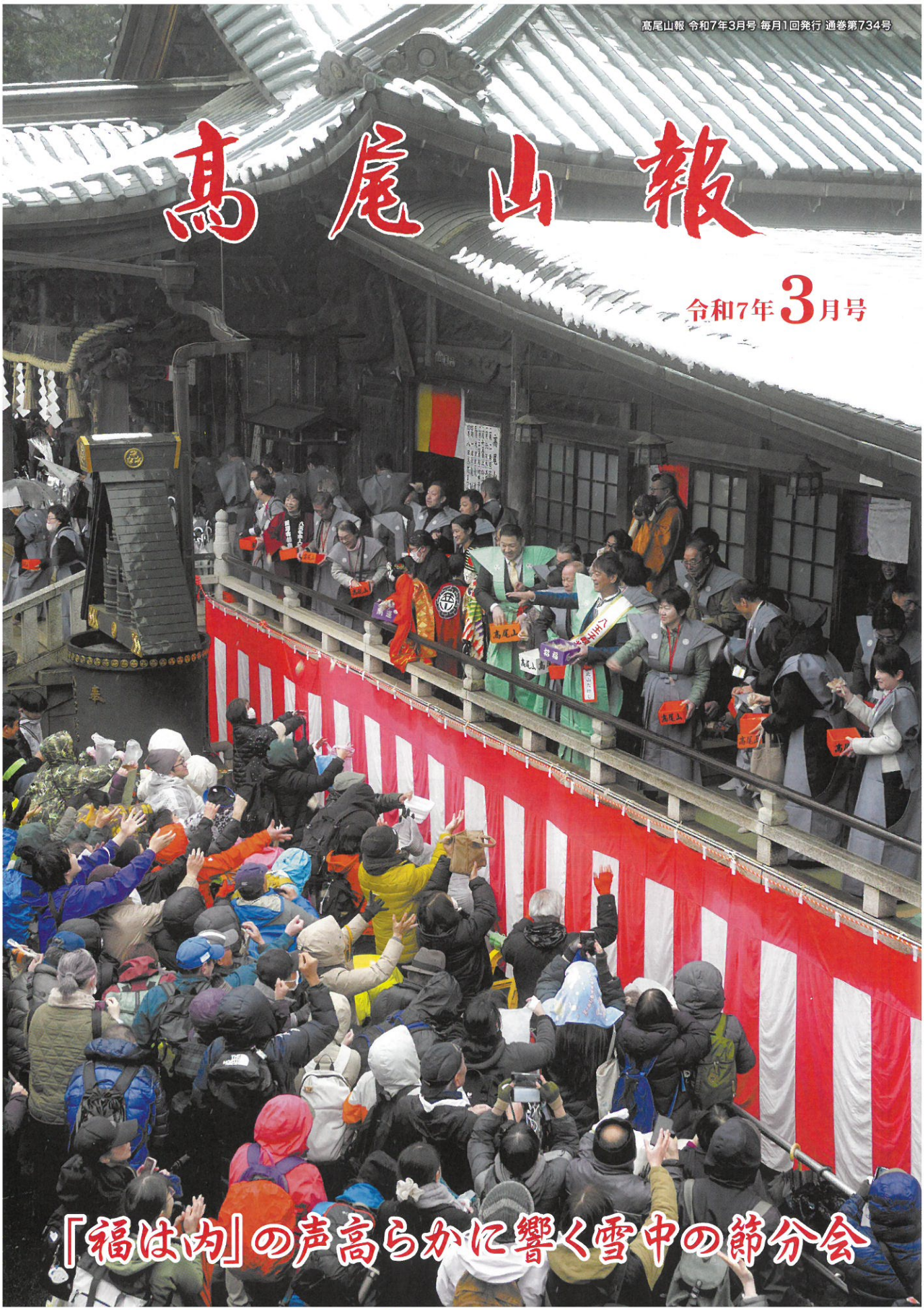
高尾山報 令和7年3月号 毎月1回発行 通巻第734号

高尾山報

令和7年3月号



「福は内」の声高らかに響く雪中の節分会

法の水茎 (153)

大正大学講師　髙橋秀城

花の香を
風のたよりに
たぐへてぞ
鶯誘ふ
しるべにはやる

（『古今集』紀友則）

（花の香りを風の使者に寄り添わせて、山の鶯を誘い出す道案内にして送りましょう）

今年は春の訪れが遅かったのでしょうか。三月の異名「弥生」を迎えて、固く閉ざしていた梅の蕾も、笑顔のように咲きほころんできました。芳しい香りに誘われるように、冬ごもりから目覚めた鳥たちも、人里近くで元気な囀りを響かせています。喜びに満ちあふれた生き物の息吹が、あちらこちらから聞こえてきます。

「花は里より咲き初め、紅葉は山より染め初むる」（桜の花は里から咲き始めて山奥へと登り、紅葉は山頂から色づき始めて里のほうへと下りてくる）という諺があります。自然は一方通行ではなく、その季節ごとに動植物も山と里とを行ったり来たりするのでしょう。

弘法大師空海（七七四～八三五）もまた、真言密教の深奥を求めて、里から山へと分け入られました。そして厳しい修行の後に得られた境地を、次のような和歌で詠っています。

中々に
なほ里近く
なりにけり
あまりに山の
奥を尋ねて

（『弘法大師全集』など）

（却ってさらに人里が近くなったよ。あまりに山奥を求めて行くと）

この歌には「迷即法性の心を」という詞書が付されています。「迷即法性」とは、「迷」（間違ったことへの執着）と「法性」（真実の姿）を「即」（一体のもの）という語でつないだ言葉で、先月号で取り上げた「煩悩即菩提」と似た意味を持つ仏教語です。鴨長明（一一五五頃～一二一六、出家して法名・蓮胤）の『発心集』序に「そともの鹿つなぎ難く、家の犬常になれたり」（戸外の鹿（善心）はつなぐことが難しく、家の飼い犬（悪心）はいつも付きまとう）と見えるように、どんな人間でも完璧な悟り（幸せ）を手に入れるのは難しく、また煩悩（悩み）を完全に取り除くのも至難の業です。

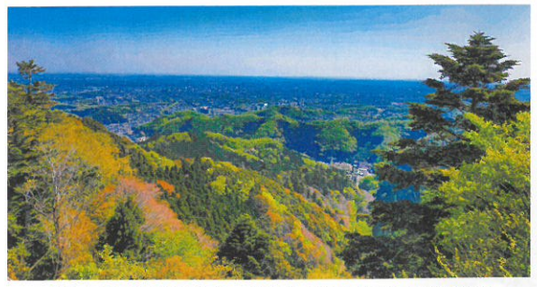
おそらく、歌に見える「里」は悩み、「山の奥」は幸せを表しているのでしょう。「迷即法性」は、どうやらも言い換えることができそうです。

お大師さまは、究極では「人里」と「山奥」は同じものと説かれました。それは里から仏の山道へと分け入って、多くの苦しみと向き合われてきたからこそ体得し得た「この世の浄土」（密厳浄土）だったのかもしれません。

さて、今月三月十一日をもって東日本大震災から丸十四年が経ちました。髙尾山薬王院においては犠牲となられた方々への鎮魂と、被災地の復興を祈念した法要を毎年執り行っておりますが、今なお故郷を離れて避難生活を強いられている方も多くいらっしゃることと思います。長期間にわたるお辛いお気持ちお察しいたしますとともに、さらなる復興を心よりお祈り申し上げます。

少しずつ時が流れゆく中で、震災で大きな被害を受けた宮城県名取市閖上地区より『閖上風土記』の復刻版が刊行されました（令和五年九月十九日発行）。私もさっそく手に取って、閖上地区の歴史や文化などを学ばせていただきました。

その中から寺院の信仰に注目すれば、閖上の海上山観音寺（真言宗智山派）の震災前の本堂は、明治二十九年（一八九六）に発生した三陸津波で漂流した木材を建築の資材とした建物であったことを知りました（ニュースによれば東日本大震災で旧本堂は失われ、令和四年（二〇二二）に新たに再建されたそうです）。



山頂より春を迎え色づきはじめたお山を望む

また、かつて閖上のお寺では日本舞踊や演劇（苅萱」や「安寿と厨子王」など）が上演されており、演者として奉仕活動に明け暮れていた母娘（大友しう様、佳代子様）のお姿を写したお写真にも胸打たれました。

さらに、『西国四国道中記』と題する写本にも目が留まりました。解説によれば、文政十四年（一八二七）二月十二日に総勢十七人で閖上を出立し、六月五日に帰着するまでを記した紀行文とのことで、参詣の途中で立ち寄った神社仏閣の由緒などが克明に記録されていたそうです。『閖上風土記』には冒頭部分の影印（写真）が挙げられており、道法という僧侶の名とともに、閖上浜から岩沼（現在の岩沼市）、亘理（現在の亘理町）までの道のりを知ることができました（この『道中記』について名取市図書館に伺ったところ「津波によって失われてしまった」とのお返事をいただきました）。

信仰に篤いこの地域は、お大師さまとも結びついています。閖上から程近い弘誓寺（真言宗智山派）はお大師さまの開基と伝えられており、また閖上漁港に注ぐ名取川を遡れば、その流域にもお大師さまの伝承が残されています。

例えば、仙台市と名取市にまたがる里山に、蕃山という山があります（東の峰の標高三五六メートル）。仙台市の「杜の都・仙台令和版わがまち緑の名所一〇〇選」にも選ばれている景勝地には、次のような伝説が語り継がれています。

昔、お大師さまがこの地を訪れたときのこと。山の姿が蓮華の葉に似ているのを見て霊場にしようとされました。九十九谷まで開かれましたが、最後の一谷に至って天狗の群れに邪魔をされて果たすことができませんでした。そこでお大師さまは紀州の高野山へと向かい金剛峯寺を開かれたということです。

（『宮城県百科事典』参照）

あと一谷あれば、蕃山は天下無双の霊地となったのでしょうか。古くからこの地に、真言密教の教えが弘まっていたことを伝える逸話と言えるものでしょう。

名取川
春の日数は
あらはれて
花にぞしづむ
瀬々の埋れ木

（『続後撰集』藤原定家）

（名取川に桜の花が散り敷いて、春が過ぎ去った日数がはっきりと知られる。瀬々の埋れ木は花びらに沈んでいるよ）

陸奥の歌枕「名取川」に、この地の景物「埋れ木」（樹木の化石）が詠み込まれています。埋れ木は花びらに覆い尽くされても、震災の記憶は決して埋もれさせてはならないと肝に銘じます。

（栃木北部教区普濟寺）　厚木市　荒井　一雄

西国四十九薬師霊場巡礼(7)

春分遊浄琉璃寺

東方旭日寶池過
日落九體堂如何
此岸彼岸両浄土
理想世界曼陀羅

煩悩ゆ
解脱に四苦八苦の現世
あの世は極楽浄土に住まん

春分の日、浄瑠璃寺に遊ぶ

朝日は真東の三重塔より登り、宝池を廻り、真西の九体阿弥陀堂に落つのは如何？

此岸（現世）東方浄瑠璃浄土
（教主：薬師如来）と
彼岸（あの世）西方極楽浄土
（教主：阿弥陀如来）…

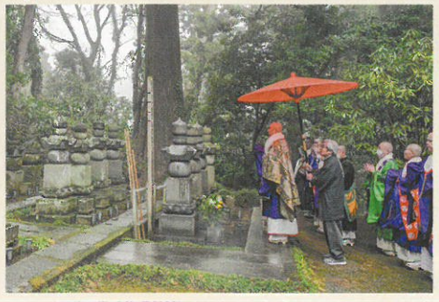
此の絶妙なる伽藍配置は顕教と密教を程よくブレンドし理想的なる曼陀羅の世界を醸し出す…

髙尾山薬王院中興第三十一世 山本秀順大和尚ご命日

二月四日は先々代貫首・山本秀順大和尚のご命日にあたります。

大和尚は平成八年二月四日、世寿八十四歳にて遷化されました。

暦の上では春を迎え、陽射しの中、歴代先師墓地において佐藤貫首導師のもと、亡き大和尚の御冥福を祈り墓前に香を手向け、懇ろに御回向申し上げました。



雪舞う中で「福は内」の声響く
高尾山節分会追儺式

二月二日(日)

俳優の笹野高史さん、女優の丘みつ子さん、俳優の松平健さんが豆をまく

左より玉正鳳関、玉鷲関、片男波親方と熊ヶ谷親方

有喜閣大広間で行われた佐藤貫首と歳男と歳女の皆様の記念撮影

原田悠里さん、山口ひろみさん、
大江裕さん、北山たけしさんも「福は内」

大本堂内に響く「福は内」の大音声（だいおんじょう）

落語家の柳家小さん師匠も豆をまく

八王子芸妓と八王子車人形・西川古柳座

大本堂前にて人気者達から福豆を頂こうと集う大勢の人々

観音菩薩の宗教 ㊼

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

如意輪観音（その25）

前号において『阿娑縛抄』の記述を引用した。「阿娑縛」は梵字の（a）（sa）（va）の漢字転写で、それぞれ如来部・蓮華部・金剛部を表す。著者の承澄は鎌倉時代の天台密教の学僧で、仏教美術に通じており、同書において仏部・明王部・観音部・菩薩部・天部などの諸尊の図像学ともに台密事相などを全二二八巻の中で詳述した。諸本が伝来するが、大正時代に天台の学僧・岩田圓教により『大日本仏教全書』第35冊～第42冊に纏められ刊行された（仏書刊行会、一九一二～一九二二年）。同書によれば、六角堂の如意輪観音像は石山寺のそれと同様とされる。今号ではその如意輪像を見る前に、石山寺について見ることにする。

絹本著色『紫式部観月図』土佐光起筆、江戸時代。紫式部が石山寺で『源氏物語』を著す様子を描く（『石山寺の美―観音・紫式部・源氏物語』大本山石山寺、二〇〇八年、一二五頁より）

石山寺が近ごろ話題になったのは、令和六年（二〇二四）、大河ドラマ『光る君へ』によるところが大きい。伝承によれば紫式部は石山寺に参籠し、湖上に映る月を見て『源氏物語』の着想を得、起筆したとされる。これを「紫式部の『源氏物語』起筆伝説」という（片桐弥生「石山寺の紫式部図と源氏絵」『石山寺の美―観音・紫式部・源氏物語』大本山石山寺、二〇〇八年、二〇四～二八頁）。この伝説は鎌倉時代の『石山寺縁起絵巻』（巻四、四紙）はじめ、江戸期の絵師・土佐光起の『紫式部観月図』など、多くの美術作品に描かれてきた。筆者の受講生によれば『光る君へ』でもその場面があったという。また大津の石山寺では、ドラマの放送に合わせて同年一月に「紫式部の筆はしる源氏物語誕生の地大津ＯＴＳＵ」なる展覧会が開かれ、東京・八王子市の富士美術館では二月に「源氏物語ＴＨＥ ＴＡＬＥ ＯＦ ＧＥＮＪＩ」が催された。さらに書店には紫式部や源氏物語関連の多くの書籍が平積みされて読書人の目を惹いた。こうした文化的性格から石山寺については、従来、仏教史や文学史や美術史など広い観点から少なからざる研究がなされてきた。

清少納言の『枕草子』にも、石山寺は登場する。『枕草子』は現代でいえば随筆であり、エッセイであり、ＳＮＳの記述にも近いものがあって、各テーマが短く現代人にも取っつきやすい。その意味で長編の『源氏物語』より気楽に読めよう。『枕草子』は日本人のみならず、はるかフィンランド女性ミア・カンキマキの心も惹きつけた。彼女は清少納言を憧れの女性として追いかけ、まるで生きている人のように「セイ」と呼び、清少納言の口調で語りかけ、その足跡を辿っている（末延弘子「訳」『フィンランドから京都へ』草思社、二〇二一年）。

他方、紫式部の清少納言評は手厳しい。紫式部は言う。「清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、真名書き散らして侍るほどにも、よく見れば、まだいと足らぬこと多かり。かく、人に異らむと思ひ好める人は、必ず見劣りし、行末うたてのみ侍るは」（山本淳子訳注『紫式部日記』角川ソフィア文庫、二〇一〇年、一二六頁）。平安文学研究者の山本淳子は、この一節を次のように現代語訳した。「清少納言ときたら、得意顔でとんでもない人だったようでございますね。あそこまで利口ぶって漢字を書き散らしていますけれど、その学識の程度も、よく見ればまだまだ足りない点だらけです。彼女のように、好んで人と違っていたいとばかり思っている人は、（最初は

新鮮味があっても）やがて必ず見劣りし、行く末はただ異様なばかりになってしまうものです」（前掲書、二八三頁）。

かく批判されながらも、清少納言は紫式部と結びつきの強い石山寺を有難い寺院として挙げている。『枕草子』一九六段に、「寺は　壺坂　笠置　法輪。霊山は、釈迦仏の御すみかなるが、あはれなるなり。石山　粉河　志賀」とし、一九八段では「仏は如意輪、千手、すべて六観音。薬師仏　釈迦仏　弥勒　地蔵　文殊　不動尊　普賢」として、如意輪観音を筆頭に挙げている（河添房江・津島知明［訳注］『枕草子（下）』角川ソフィア文庫、二〇二四年、八一～八二頁）。

菅原道真の玄孫の娘である菅原孝標女は、「（前略）後の世までのことをも思はんと思ひはげみて、十一月の二十余日、石山に参る」と述べ、来世のことを考えて石山寺に詣でたと『更級日記』第六三段に記している（原岡文子［訳注］『更級日記』角川ソフィア文庫、二〇〇三年、八七頁）。彼女はその二年後にも「二年ばかりありて、また石山にこもりたれば、よもすがら雨ぞいみじく降る」（同書、九六頁）と、石山寺にお籠りしたことを書き記した。

右大将道綱母は、恋しい夫・藤原兼家に会えぬ辛さから、生後間もない子の道綱をも置いて密かに石山寺に詣でた。その著『蜻蛉日記』には次のようにある。「忍びてと思へば、はらからといふばかりの人にも知らせず、心一つに思ひ立ちて、明けぬらむと思ふほどに出で走りて（後略）」石山寺に向かった。平安文学者の坂口由美子訳では、「（石山寺に）こっそりと詣でようと、妹にも知らせず私一人で決めて、夜が明けたと思うころ走るように家を出た」とある（『蜻蛉日記』角川ソフィア文庫、二〇〇二年、一三三～一三五）。石山寺で道綱母は、「御堂にて、よろづ申し、泣き明かして、暁方にまどろみたるに、見るやう（御堂で御仏に何もか申し上げ、泣き明かして明け方にふとまどろんで夢を見た）」（同書、一三七～一四〇頁）。その夢は、石山寺の別当らしき僧が銚子に水を入れて持ってきて、彼女の右膝に注ぎかけるものだった。彼女はハッと目が覚め、御仏が彼女を憐れんでお見せになったのだと理解して、いよいよあわれに悲しくなったという（同）。

紙幅の都合で引用は避けるが、和泉式部も石山寺に籠ったことを詳述している（川村裕子編『和泉式部日記』角川ソフィア文庫、二〇〇七年、八八～九六頁）。

以上、平安時代の女性貴族の古典から石山寺に関する記述を見てきた。ところで、英語の classic の原義は、「最高級の、模範的な」である。この語を和訳すると「古典」となるため、文芸・芸術に関して古いことがクラシックの第一義のような誤解をしてしまう。しかし、その原義は「一流」たることであり、その結果、幾星霜をも耐え抜き今日まで伝存してきたことになる。しかし、第一級、超一流の作品であっても、消えてしまったものも多数あったはずである。自然消滅した作品だけでなく、災害によって失われたものも多かろう。例えば太郎焼亡といわれた安元の大火（一一七七年）には、内裏のほか朱雀門や応天門など、平安京の三分の一が焼失し、翌年には次郎焼亡といわれる大火が都を焼いた。世の無常を書いた『方丈記』の時代である。かかる苦難を乗り越えてきたのが、上述の諸作品であり、それによって平安貴族女性の石山信仰を知ることができた。その一方で、消えた記録の中にも石山信仰・如意輪信仰をした人がいたはずである。我々は奇跡的に残った記録から平安朝の貴族女性の石山信仰・如意輪信仰の一端を知ったことになる。

こうした平安貴族の女性たちが石山寺詣でをしたことを日本文学研究者の木村朗子は、「女たちは石山寺を目指す―なぜ如意輪観音が本尊となったのか」と題し、「奈良の長谷寺とならんで、石山寺は女性が物詣でする寺として確固たる地位を築いていた」と評した（https://www.webchikuma.jp/articles/-/629?page=2）。また先の山本淳子は、紫式部や道綱母や和泉式部が種々の悩みをもって石山寺に籠ったり詣でたりしたことを挙げ、「苦しい時の石山頼み」と表現している（『平安人の心で〈源氏物語〉を読む』朝日新聞出版、二〇一四年、六七頁）。いずれも平安期の篤信の石山・如意輪信仰に関する的確な表現である。

高尾山涅槃会

二月十五日（土）

お釈迦様が入滅されたと伝わる二月十五日、高尾山上にて釈尊涅槃会が執り行われました。

初めにお釈迦様の真身舎利が納められる有喜苑・仏舎利塔内において佐藤貫首導師のもと法要が営まれました。この真身舎利はタイ王室を通じ、タイの寺院、ワットパクナムより、日本の青少年の健全な育成を願い分贈され、昭和三十一年より高尾山の地に奉安されております。

その後、高尾山書院内に移動し、「高尾涅槃図」の前でお釈迦様の御遺徳を偲び懇ろに御供養されました。涅槃図とはお釈迦様が入滅された時の様子が描かれた絵画であり、高尾山の涅槃図には天狗や紅葉の木なども描かれております。

高尾涅槃図の前にて御供養致しました

初甲子大黒天祭

二月二十四日（月）

クコの木奉納者御芳名

八王子市　増本　文子
〃　増本　智子
日野市　増本　かおり
川崎市　小泉　達
八王子市　佐宗　政光
〃　佐宗　和美
〃　佐宗　愛子
〃　佐宗　千明
〃　河西　光子
日野市　田沼　保行
〃　田沼　昭子
八王子市　内藤　アヤ子

（順不同・敬称略）

初午福徳稲荷祭

二月六日（木）

飯縄権現堂（御本社）脇の福徳稲荷社において商業繁昌・五穀豊穣などを祈念する高尾山初午福徳稲荷祭が行われ、参列の御信徒の皆様と共に祈りが捧げられました。

初午の法要は、京都伏見の稲荷神社の祭神が、和銅四年（七一一）の二月最初の午の日に降臨し鎮座されたと伝わるため、毎年二月初午の日に行われております。

高尾山浅草分霊院大祭

二月十一日（火）

高尾山浅草分霊院において佐藤貫首導師のもと例大祭が執り行われ、普段分霊院を管理して頂いている地元の寿一丁目町会の皆様にご参列を賜り、諸願成就をご祈念致しました。

浅草における高尾山信仰の歴史は江戸期に始まり、明治大正期になると縁日の日には盛大な賑わいを見せていたと伝わっております。

戦災による堂宇焼失を経ても信仰の灯は消えることなく、昭和四十五年に分霊院として再建されました。現在では有志の方々によって維持され、地元の方々の憩いの場となっております。

寿一丁目町会の皆様と共に、諸願成就をご祈念致しました

いけばなの心 ⑥⓪

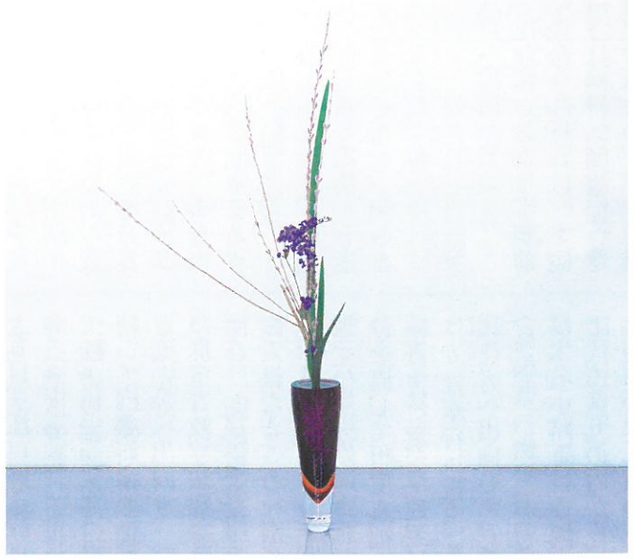
華道教授　佐藤　宗明

三月になると、道端や庭先で可憐な花々が咲き始め、心が弾んできます。今回は、小さな花をたくさんつける「ハーデンベルギア」に注目し、春らしい作品を生けました。

作品の中ほどにある紫の花がハーデンベルギアです。ツル性植物ですが、しっかりとした茎で立ち上がるような姿が印象的でした。そこで、繊細ながらも伸びやかさを感じさせる行李柳と、すっきりとした印象のオクロレウカを合わせ、三種生でまとめました。

行李柳は、春先に白や淡い色の穂のような花をつけ、いけばなでもよく用いられる花材です。今回は行李柳で作品に高さを出すことで、ハーデンベルギアの持つ可憐さと存在感を一層引き立てました。加えて、雰囲気を損なわないようオクロレウカを取り入れ、作品全体に瑞々しさをもたせています。

普段、ツル性の植物は置き生けにはあまり使いませんが、背の高いガラスの器を用いることで軽やかで洗練された印象に仕上がりました。春の息吹を感じさせる、柔らかくも凛とした佇まいの作品となりました。



花材：ハーデンベルギア・行李柳・オクロレウカ

高尾山年代記 63

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

十九世秀観2　文政出開帳始末記（上）

文政二年（一八一九）一月に高尾山主を継承した秀観にとって最初の一大事業が、文政四年三月一日から五月二五日にかけて執行された内藤新宿（東京都新宿区）太宗寺における出開帳だった。

出開帳の招請を受ける

秀観は「新宿太宗寺境内において開帳願一件」という記録（写真）を残している。冒頭に「もし年限来り開帳等いたしそうらはば」「この記録よくよく見分け申すべき事」と作成の意図が記されているように、書面は開帳を招請した内藤新宿側の世話人が差し出した議定に始まり、寺社奉行所への願い出とそれまでの間に発生したさまざまなトラブル、開帳実施の段取り、助力を得た檀家や最寄り村々との交渉まで、提出した書類の文面から開帳場の平面図に至るまで、一通りの出来事が実に詳細に記されている。そこからは、秀観の一挙手一投足が読み取れるので、事の次第を追ってみたい。

最初にある文政三年五月付の議定は、世話人惣代福島屋清兵衛他八名の連名で「宿内繁栄にもあい成るべし」との理由から開帳を願い出、所々への案内立札の設置や開帳場の設営、宿内関係者への対応などを引き受け、「諸掛り不足つかまつりそうろうとも、私ども宿内より奉納」「少しも御当山へご苦労あい懸け申すまじく」と結んでいる。別の箇所に「当春中より掛合い」とあり、当時の春とは一～三月を指すので、すでに年初の頃から開帳誘致の話が来ていたことになる。

秀観は実施に慎重だった。前回、寛政三年（一七九一）の出開帳で世話人を務め、七二歳で存命だった伊勢屋忠七に助言を求めたところ、（参拝者を多く見込める）下町での執行か（山内での）居開帳にすべきと、捗々しい回答を得られなかった。当時は四谷大木戸の外となり「御府外」とされる内藤新宿が人を集める適地であるか、かなり不安視され、「当山世話人」が三度にわたり断りを入れていたが、宿側の「達って招請」や高尾山に多大な貢献のある民間宗教者足袋屋清八の口添えもあり、終には情誼上やむなく実施を決めるという次第になった。

開帳の実施が決まると、上長房村駒木野宿の檀頭[註1]高城忠三郎ら、また、最寄りの上長房・上椚田両村の名主らに協力を依頼している。高城らは長老格で「右仁は比丘様（一六世秀憲のこと）より当代まで四代世話そうろうに付き、この節も頼み」とし、村中からも「（協力は）思し召し次第」と返答を受けるなど、頼みとする存在だった。

江戸へ出府

出開帳のおよそ半年前にあたる九月五日、秀観は寺社奉行に開帳願いを提出するため、末寺蓮乗院方道らとともに江戸へ出府。四谷谷町（新宿区若葉二丁目辺り）の妙光院を旅宿とした。手はじめに内藤新宿の世話人らと会合を持つが、そこで思わぬ事態を知らされる。すなわち、太宗寺が無住となったため芝増上寺へ後住を願い出ており、少々日数がかかるので、奉行所への願い出を待ってほしいとのことである。

しばらくの猶予を見た一五日、江戸触頭[註2]真福寺（港区愛宕一丁目）にて願書の確認を受ける。続いて内藤新宿の世話人と太宗寺へ出向き、兼帯の珠宝寺及び法類寺院と面会、開帳場借用を申し入れたところ「別条これなき趣」とのことから、翌一六日に添削された部分を直して再度真福寺へ願書を持参。早速翌日には寺社奉行松平周防守康任方へ出向いた。浜田（島根県）松平家の藩邸は大名小路と言う現在の千代田区丸の内から皇居外苑にかけての一画にあった。応対した公用人野村市左衛門に開帳願の書面を披見すると、追って連絡するとの回答を得て退出。この時点では、この後、再三再四足を運ぶことになるとは、予想もしなかったであろう。

秀観の奔走

二三日に呼び出しを受け浜田藩邸を訪れると、開帳場となる太宗寺からも地所貸出の願書を出すようにと指示を受ける。戻って珠宝寺に相談すると、実は無住というのはごまかしで、住職は重病で逼塞しており、隠居させて後住が決まるまで待ってほしいと言う。藩邸への再訪日は二六日、十月五日と再々延期となり、一七日までの猶予となるが、一六日になって世話人と珠宝寺が訪れ、今度は太宗寺を菩提寺とする高遠藩内藤家の目付が故障を申し立てているという。秀観としては唖然とするよりない状況だが、すぐさま尾張徳川家中の千村氏なる人物を訪ね、この件は尾州家が動いて解決する。先代秀神の時は、紀伊徳川家へ出入り筋の護摩檀家を通じて祈祷所復興を果たした。尾張家中においては武野新左衛門という藩士が護摩檀家として確認でき、後々尾州家祈祷所となるにあたって仲介役を果たす。文政三年時点で武野が檀家であったか不明ながら、尾州家にもコネクションを持っていたということのようだ。

秀観が一七日に浜田藩邸を訪れ、あらためて日延べを願い出ると、野村市左衛門は快く応諾しつつ、府外での開帳の例はなくはないが、開帳場の交渉が不調であれば場所替えをしてはどうかと親身の提案も受ける。実は浜田松平家は先代康定の頃からの護摩檀家だった。それ故か、その応対はきわめて鷹揚であったと言える。しかしながら、秀観自身珠宝寺の煮え切らない態度に対し、場所替願いを出す旨返答したと記録にあるにもかかわらず、新宿側の懇願に折れて交渉は継続される。

月が替わって十一月四日、増上寺から願書を求められて出しに行くが、折柄訴訟の処理中で提出に手間取った挙句、字句の修正を求められ、翌五日、寺社奉行所へ出向いてみれば、外神田辺りで火事が発生し掛りの役人が出役中で翌日出直しと、思い通りに事が運ばない秀観の胸中察するに余りある。それでも、何とか開帳願提出の段取りが整うと、一〇日は紀伊徳川家へ開帳場に葵紋付の提灯を飾る許可を得に訪問している。

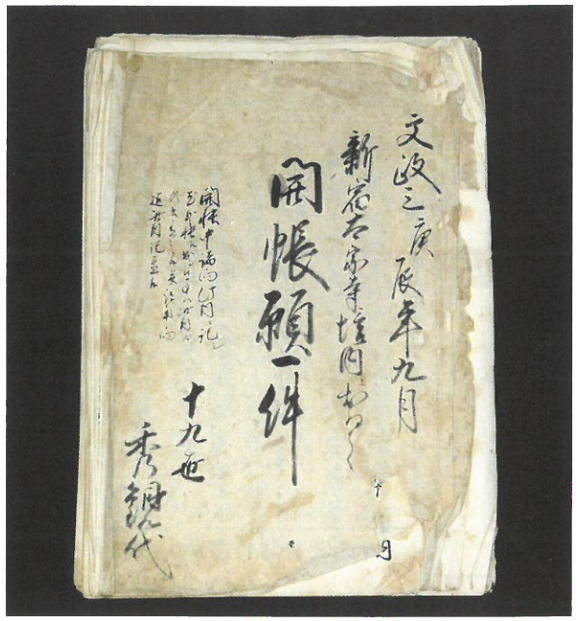
十一月一八日、ようやく寺社奉行松平伯耆守宗発の内寄合へ出頭、提出した開帳願は同役の康任が読み上げ、追って沙汰するとのこと。秀観はすぐさま野村に面会して今後の手順を打ち合わせるが、度々面会を重ね野村とも随分懇意になった感が字句から読み取れる。二七日、再び伯耆守内寄合へ出頭、康任が許可を回答した。退出すると野村にこの旨報告。同役の松平武厚、水野忠邦方にもお礼の挨拶に出向くが、大雪のため水野宅へは翌日の訪問になったとする。同日に鳥見役[註3]大岩庄右衛門、十二月一日に内藤新宿を管轄する代官小野田三郎右衛門への届けが済み、開帳実施に係わる諸手続きにひとまずの区切りがついた。帰山は十二月六日。新暦では十月上旬となる出府から、三ヵ月の長きにわたる滞在を経て時節は真冬となっていた。

註1　祈祷寺院としての性格の強い薬王院であったが、上長房村に五家、上椚田村に三四家の菩提檀家があった。

註2　寺社奉行の配下として寺社行政に任ずる愛宕真福寺ほか三ヶ寺のこと。「御触」を発する立場なので「触頭」と称される。

註3　江戸の周辺地域は将軍が鷹狩をおこなう鷹場に指定されていた。そのため、鷹場を管理する鳥見役に対する届けも必要だった。

おことわり　本連載では史料の引用について、適宜、読みやすく原文に手を加えています。



秀観によってまとめられた出開帳の詳細な記録（法政大学多摩図書館寄託）

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「心をまあるく」

八王子市　峰尾里枝子 様

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

三十八段　夢の実現不断の努力

何の見通しもなく努力を続けることは、時に空虚さを感じてしまうことがあります。「自分を飽きさせない」ために目標を心に留めておきましょう。大きな目標だけでなく、継続的に挑戦するためにも、小さな目標を設定することも大事です。

高尾山 季節散歩

和風月名 夢見月「ゆめみづき」

旧暦の三月は、現在の四月頃にあたります。桜をはじめとして多くの花が咲く季節なので、花にちなんだ異称があります。

桜には「夢見草」という呼び名があることから、桜が咲く月という意味で「夢見月」という異称が生まれました。

今月の風物詩 卒業式

卒業式は春の訪れとともに迎える節目であり、出会いと別れが交錯する瞬間です。新たな旅立ちを迎え、新しい出会いがある一方で、共に過ごした仲間や先生との別れの時でもあります。

春の穏やかな空気の中で、未来への希望と少しの寂しさを感じるひと時です。

国際ロータリー第2830地区 職業奉仕フォーラム

当山貫首講演

於・八戸パークホテル　二月八日(土)

公益社団法人全日本不動産協会 東京都本部 多摩南支部

当山貫首法話

於・八王子エルシィ　一月二十四日(金)

恩師・菊地正先生に学ぶ(10)

創作書おろし「八王子空襲擬人化物語」

エントツ君の嘆き その二

八王子市　石井忠明

八王子空襲では市内各地に大きな被害がもたらされ、エントツ君は大いに嘆き悲しんだのだが、更なる悲劇が待っておったのじゃ。

八王子空襲の三日後、八月五日に浅川駅(現高尾駅)を出発した新宿発松本行き四一九列車が湯ノ花トンネル(猪の花トンネル・裏高尾町)に差し掛かったところ、なんと飛来してきたアメリカ軍のP51戦闘機から機銃掃射の銃撃を受けたのじゃ！

死者六十五名余、負傷者百三十名余で戦争による我が国最大の列車銃撃事件となったのじゃ。列車には疎開や買い出しに山梨や長野方面へ向かう乗客がおり、銃撃された列車の中は即死者や呻き声で修羅場と化していたと。中には機銃で撃ち落された片腕をぶら下げながら、「私の手が！ 私の手がぶった切れている！」と喚きながら列車から飛び降りた、数メートルよろよろと歩いたところでバタンと倒れて動かなくなったと…

湯の花トンネル列車銃撃事件被害者の名が刻まれた慰霊碑
毎年八月五日には慰霊祭が行われている

エントツ君は「万物の霊長と言われている人間様同士が何故愚かな戦争を続けているのか、僕達には最低な動物にしか見えない」そこで染物屋や風呂屋それに別の和菓子屋に立つエントツ仲間に聞いてみたと。するとな、皆は口々に「焼けただれているところが今でも痛くて立っているのがやっとさ。戦争さえなけりゃ、情けねぇ、近々壊されるらしいとよ」

そして遂に、昭和二十年(一九四五)八月六日、世界で最初の原子爆弾が広島に落とされ、さらに九日に長崎にも落とされたのじゃよ。

「ピカドン」と強力な光が走った瞬間、原爆の中心地にいた人達は即死し、離れていても全身火傷や放射能の病で大勢が亡くなったという事じゃ。

こうして日本は原爆投下を機に、無条件降伏を求めるポツダム宣言を受諾、八月十五日にアメリカ合衆国等、二十六ヵ国からなる連合軍に降伏したのじゃ。玉音放送を経て九月二日にアメリカ軍の戦艦ミズーリ号上で、玉音放送を経て九月二日にアメリカ軍の戦艦ミズーリ号上で、GHQ(連合国軍総司令部)の最高司令官マッカーサーを筆頭とした各国代表が見守る中、外相重光葵が降伏文書に調印し、日本は敗戦国となって終戦を迎えたのじゃ。日本は敗戦国となって終戦を迎えたのじゃよ。

そんな中で、明治から今まで相次ぐ戦争を見つめて、ましてや八王子空襲の惨劇を経験した「エントツ君」は嘆きに嘆いたと。「エントツ君の僕が声を大にして訴えているのに聞こえないのが口惜しい。僕が人間だったら！ 僕が人間だったら…」

和菓子の元木屋に造られた「エントツ君」は明治大正昭和に渡って八王子の街並みを上から見守って来たのじゃが、戦後の高度経済成長期になると人口が増えて、背の高いビルもあちこちに立つようになったのじゃ。

次第に時代が変わり、エントツから出る煙りが公害の原因とされるようになると、エントツ君や仲間達も徐々に取り壊されていったのじゃ。

だがな、「エントツ君」の大きな土台だけは令和四年まで残っていたと。遂にその土台も撤去されてな、長く続いた悲喜交々の歴史を見つめてきたエントツ君の一生に幕が引かれたという訳じゃ。

人は何故争い続けるのじゃろうか。建物までが戦争をヤメテと言っておるのに…

とんとんむかしは
へぇしまい

おはなし散歩道

少し勇気を出せば

八王子市　池田美絵

大好きな連載漫画が単行本になったというので、ユウトは書店に出かけた。念願の第一巻を手に入れ、（ついでにポテチと炭酸も買っていこう！）と隣接するスーパーマーケットに入った。

そうしてレジに並ぶと、数人前にカゴ一杯に食材を入れたおじいさんがいた。（ちぇっ、ついてないなあ。時間かかるよ）。ユウトは小さく舌打ちした。

ようやく自分の番が来て会計をすまし、ポテトチップスと炭酸飲料をバッグの中に入れてスーパーを出ようとしたのだが、袋詰めをする台のところで先ほどのおじいさんが難儀しているのが目に入った。レジ袋のビニールがくっついて開けられないようだ。知らない人だけれど、困っている人を見て見ぬふりをするのもしのびない。ユウトは勇気を出して「袋開けますか」と声をかけた。

「すまないね。年を取ると手が乾燥しちゃって開けづらいんだよ」と、おじいさんが応えてくれたので、ユウトは正直ほっとした。無視されたら身の置き場がない気がする。気さくで優しい雰囲気のおじいさんだった。

カゴの中には、一リットルの牛乳パック三本、焼きそば三袋、キャベツ、ニンジン、玉ねぎ、肉類、食パン、スナック菓子などが入っている。とてもおじいさんが食べられる量だとは思えない。「大量ですね」と思わず言ってしまったのだが、おじいさんは頬をゆるめた。

「今日ね、孫が泊まりに来るんだよ。野球をやっていて牛乳を水みたいに飲むんだよ。だから三本買ったの。夕飯は焼きそばが食べたいんだって」。

（なるほど。若い人が好きそうな物ばかりだもんね）。ユウトは合点がいき、このおじいさんと孫は仲がいいんだなと感じて羨ましくなった。自分にもおじいさんはいるが、会うのは年に一度ぐらい。会っても母親の後ろに隠れてろくに話したこともなかった。おじいさんがレジ袋に品物を入れるのを見ながら、ユウトはそんなことを思った。

そうして、食材は大きなレジ袋二つになった。その段になって（その荷物を歩いて持ち帰るとしたら大変ではないか）とユウトは気になった。

おじいさんに聞くと、「自転車で来たから大丈夫」ということなので、「じゃあ、そこまでぼくが持ちます」と、ユウトは伝えた。初対面の人にこんな言葉が出るなんて、ユウトは自分に驚いた。レジ袋を開けるお手伝いをしようと思っただけなのに、気がつくとこんな展開になっていた。

「ありがとう。助かる。ところでキミは何年生？」「中二です」「それならうちの孫と同い年だ」。おじいさんはニコっと笑った。

駐輪場まで行く道すがら、会話が弾んだ。レジ袋はユウトの手に食い込んで痛かったが苦にはならなかった。

「今日はとても助かったし、キミと話せて楽しかったよ」。おじいさんは自転車にレジ袋を積みながら何度もお礼を言ってくれた。それはユウトも同じだった。（今日はなんだか、ほっこり）。ユウトは温かい思いを抱いて踵を返した。

（挿し絵・小出　茂）

高尾山内八十八大師巡拝のご案内

多くの方が参拝できますよう左記のように二つのグループに分け、途中（山上十一丁目茶屋前第十七番札所）で合流し、一緒に巡拝いたします。

A、不動院から琵琶滝を経由して薬王院まで歩く

B、ケーブルカーを利用する

（琵琶滝周辺のお大師様は巡拝できません。また、ケーブルを利用する場合代金は自己負担になります。）

日　程　五月十三日（火）

行　程　山麓不動院→琵琶滝→仏舎利塔→本堂（護摩修行）→大師堂（法楽）→坊入（昼食）→一号路（下山）→不動院（解散式）→解散

参加費　五千円（昼食代・保険料含む）

集合場所　山麓不動院（八時半集合）

定　員　四十名

お申し込み開始は四月中旬頃となります。詳細は来月号又は当山ホームページにてお知らせ致します。

高尾山の昆虫

クリシギゾウムシ

185

ゾウムシは日本で約千三百種が知られ、生物界最大のグループとして知られています。ほとんどが小型且つ地味な種で占められていますが、シギゾウムシの仲間はゾウムシ特有の口吻が特に長く伸び、嘴の長いシギという鳥によく似ています。

シギゾウムシは多種に及びますが別名「どんぐり虫」とも呼ばれ、幼少の頃どんぐりから出てくる幼虫を見てビックリした経験を持つ人は多いことかと思います。

クリシギゾウムシ（栗鳴象虫）はシギゾウムシの中でも大型で、口吻の長さも群を抜きます。鳥のシギでもこんな長い嘴を持つ種はいませんし、オスの口吻はメスに比べより長大で、シギの範疇を超えていて奇虫と言っても差し支えない雰囲気です。

特にクリの害虫として知られ、クリの実から出てくる脚のない地虫状の幼虫は本種の物で被害もバカにならず駆除の対象になります。

成虫の活動期間は僅か二週間程度で、その間に交尾し長い口吻を使い産卵し、クリの実で育った幼虫はその後土中で蛹化して、その後羽化します。

シギというより、鯨の仲間のイッカクを思わせる愛らしい甲虫だと思います。

（撮影・文　松島　孝）

高尾山報助成金志納者
御芳名（順不同・敬称略）

浜松市　竹内　恒夫
柏市　天野　久仁子
新座市　彰山　粧麗
港区　吉田　貴喜
小平市　関　道雄
八王子市　峯尾　洋一郎
羽生市　増田　久雄
世田谷区　塚越　絹代
八王子市　秋山　諭
香取郡　石橋　秀一
比企郡　小鷹　健一
飯能市　土屋　秀子
八王子市　山本　千枝子
宮崎市　田﨑　恵子
八千代市　鈴木　健也
相模原市　小野沢　波枝
行田市　渡辺　宏
高崎市　梅山　喜美男
北区　橋本　操
静岡市　豊島　淑子
船橋市　桑澤　俊義
さいたま市　出口　利男
調布市　星野　康太
八王子市　木原　茂
狛江市　熊澤　利久
行田市　竹村　宏己
八王子市　菊地原　義明
練馬区　鈴木　雅一
秦野市　鈴木　和江
高尾山健康登山者一同

登山だより

四月行事日程

一日
滝びらき

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）

六日、十八日、三十日
弁天秘供

八日
花まつり（仏舎利塔）

十五日、二十二日
御詠歌勉強会（十時不動院）

二十六日
月例写経会
（十三時山麓不動院）

二十七日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
（十二時半山麓不動院）

二十八日
奥之院開扉供養
（十時奥之院）

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）

☆神徳報謝百味飲食供

高尾山御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝し、沢山の御供物を捧げて御本尊様威光倍増の為、御供養申し上げる法要です。

皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は大本堂までお申し出下さい。尚、法要終了後に百味のお札を授与致します。

毎月二十一日午前九時勤修
御志納金　一口三千円以上

毎日のお護摩奉修時間

午前9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

高尾山春季大祭

大護摩供法要（大本堂）
柴燈大護摩供（有喜苑）

四月二十日（日）

稚児装束の可愛らしいお稚児さん達

高尾山春季大祭お稚児募集

昔から「子宝」という言葉がありますように、ご家庭は子孫の成長によって、子子孫孫に受け継がれ発展していくものです。私達が次代を託するという意味では、子供は文字通り宝であります。

皆様方のお子様が高尾山御本尊飯縄大権現様の御加護の下、健康に、逞しく成長されますよう、お稚児練り供養にご参加をお勧め申し上げます。

定　員　百名（定員になり次第締め切らせて頂きます。）

参加料　お稚児　七千円　付添人　千五百円

お申込・お問い合わせは高尾山お稚児係まで
☎〇四二―六六一―一一一五

高尾山報助成金御志納のお願い

当山では、大護摩修行等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報をご送付しております。

引き続いてご愛読して頂けますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　犬山秀康
編集人　菅井倫浩
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院ホームページ
https://www.takaosan.or.jp
下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます